供述調書

平成９年７月７日付

（氏名等略）

一　それでは、前回に続いて話します。

前回話したように、平成９年５月２４日昼頃に、「タンク山」山頂付近にあるケーブルテレビアンテナ施設の入口前付近で、Ｂ君の首を絞めて殺したことに間違いありません。

［この時本職は、平成９年５月３０日付け、本職作成にかかる捜査報告書添付の写真番号３６及び写真番号２７を示し、各写しを資料一及び資料二として、それぞれ本調書末尾に添付することとした。］

今お示しの写真番号２６の写真は、僕が話している「タンク山」のケーブルテレビアンテナ施設の入口付近を撮影された写真に間違いなく、僕がＢ君を殺した場所は、その写真の中央に写っているケーブルテレビアンテナ施設の入口前付近に間違いありません。

また、写真番号２７の写真に写っているフェンスの中の建物が、これまで僕が「鉄の建物」と言って話している建物であり、その建物の床下にＢ君の死体を隠したのです。

二　Ｂ君を殺した時の様子は、前回話したとおり間違いありません。

なお、最初、Ｂ君を殺すために、Ｂ君の後ろから右腕をＢ君の首に巻き付け、その右腕に左腕を絡めて、Ｂ君の首を絞め付けたものの、Ｂ君が死ななかったので、更にその状態でＢ君を強引に前に倒して俯せにし、馬乗りになってＢ君をエビ反りにするような感じでＢ君の首を絞め上げました。

それでも死ななかったので、Ｂ君を仰向けにし、仰向けになったＢ君に馬乗りになって、両手でＢ君の首を締め付けました。

絞め付けた状況は、両手で両手の親指と人差し指の間を、丁度、Ｂ君の喉仏と交差させるようにして、親指や人差し指に力を入れて、Ｂ君の首を締めたのです。

それでもなおしななかったので、前回話したように、側にあった石を取ろうとしたり、

左足に履いてい靴紐を時、その靴紐でＢ君の首を締めて殺しました。　僕はＢ君を殺してる時、前回も話したように、僕が一生懸命Ｂ君を殺そうとしているのに、なかなか死ななないＢ君に対し、腹が立ったりしましたが、同時にＢ君を殺しているという緊張感、あるいはなかなか死ななないＢ君に対する怒り等も含めて、殺していること自体を楽しんでいました。

そして、最終的に、Ｂ君が死んだと分かった時、僕は、Ｂ君を殺すことが出来、Ｂ君を支配出来て、Ｂ君が僕だけのものになったという満足感でいっぱいになりました。

その満足感は、それまで僕が人を殺した時を考えて、得られるであろうと思っていた満足感よりももっと素晴らしいものでした。

確かに僕は、３月１６日に、須磨区竜が台で、二人の女の子を殴ったりナイフで刺したりし、後日、僕がハンマーで殴った女の子は死んだということを知りましたが、この時は、一瞬のことであり、大した満足感は感じませんでした。　しかし、Ｂ君の場合は、殺すのになかなか時間が掛かったので、それだけに満足感が得られたのです。

Ｂ君を殺したことによって感じた満足感は、あまり長続きせず、死体をどこに隠そうか等と考え始めた時には、満足感は消えていました。

三　Ｂ君を殺した後、Ｂ君の死体を隠したりした状況についても、前回話したとおり間違いありません。

Ｂ君の死体を隠した時の絵を、今書きましたので、提出します。

［この時本職は、被疑少年が任意に作成し、提出した図面を受取り、資料三として、本調書末尾に添付することとした。］

僕がＢ君の死体をケーブルテレビアンテナ施設の鉄の建物の床下に隠した状況を絵に書きましたが、刑事さんからケーブルテレビアンテナ施設内の鉄の建物については

局舎

と呼ばれていると教えて貰いましたので、図面には「局舎」といって書いています。

衝動

四　Ｂ君の死体を隠した後、前回話したように、その日の午後４時に、

Ｖ

というビデオショップで

＊＊君

と

＊＊君

と待合わせていたことから、ケーブルテレビアンテナ施設の入口に掛かっていた南京錠を切るのに使った「糸ノコギリ」は、「局舎」の側にあった溝の中に隠しました。

その溝には、落葉がいっぱい貯まっていたので、その落葉の中に隠しました。　隠した場所についても、先ほど提出した図面の中に書きました。

その後、××君たちと遊んで、僕が家に帰ったのが、午後６時過ぎ頃だったと思います。

家に帰ると、お母さんが、僕に、

Ｂ君が、何かおらんようになったみたいよ。

と言いました。僕は、Ｂ君を殺して来た等とは言えないので、お母さんには、　ふうーん

と返事しました。

僕は、その後、家の二階にある僕の部屋へ上がりました。

僕の家は二階建てで、１階は居間と両親の寝室と、台所、風呂等があり、２階は、僕の部屋と二人の弟が使っている部屋があります。

僕は、２階の僕の部屋に行った後、疲れていたので、ベッドに横になり、寝てしまいました。それで、その日の夕御飯は食べていません。

僕は、早く寝てしまうと、よく夜中に目が覚めるのですが、この日も夜中に目が覚めてしまいました。

時計を見ていないので、何時頃目が覚めたかまでは分かりません。

目が覚めた僕は、今日一日のことを振り返りました。

Ｂ君を殺したときの様子等を思い出していたのですが、その内、ケーブルテレビアンテナ施設の入口の南京錠を切るのに使った糸ノコギリを施設の中に隠しているのを思い出しました。

糸ノコギリがあるということを思いだした僕は、自然にフッと僕の頭の中にその糸ノ

コギリで人間の首を切ってみたいという衝動に駆られました。

もっと具体的に言うと、人間の身体を支配しているのは頭だから、その司令塔の頭を胴体から切り離してみたい、その時に手に伝わってくる感覚や、切った後の切り口も見てみたいと思ったのです。

僕自身、これまで何十匹という猫を殺して、首を切ったりしましたが、猫だと、ナイフ一本で簡単に切れるし、もっと大きなもの、しかも僕と同じ種族である人間を切ってみたいと思いました。

問　人間の首を切ってみたいという衝動は、それ以前からあったのか。

答　以前にも考えたことがあるかもしれませんが、仮に考えたとしても、その後ずっと忘れていて、この時、急に衝動に駆られたのです。

そこで、僕は、明日すなわち五月二十五日の日に、再び「タンク山」のケーブルテレビアンテナ施設へ行って、隠している糸ノコギリで、B君の首を切ってやろうと考えました。

そして、再び、寝たのです。

五　五月二十五日は、いつものように午前十〇時から十二時の間に起きたと思います。

そして、いつものように自分でパンを焼いて食べ、昼過ぎ頃、B君の首を切るために自宅を出ました。

自宅を出た時間は、時計を見ていないのではっきりしたことは分かりませんが、午後一時から午後三時までの間だったと思います。

首を切るのに準備したのは

　　ビニール袋二枚

でした。

僕は、人間の首を切ると滅茶苦茶血が出ると思いました。

そして、血を現場に残していると、何となく脚が付き易くなるのではないかと思ったので、血を入れるナイロン袋が二枚位いると思ったからでした。

それで、家の台所の食器等がたくさんはいっている棚に、引き出しが付いているのですが、その引き出しの中から黒色のビニールのゴミ袋を取り出して持ちました。

また、B君の首を切った後、糸ノコギリをどこかに捨てようと考えていたので、その糸ノコギリを持ち運ぶために、学校で使っている

補助カバン

を持って行くことにしました。

また、僕は、「龍馬」のナイフを三本と出刃包丁一本を持っているのですが、「龍馬」のナイフ三本の内、二本は親に見付かって取り上げられていたので、僕が自由に使えるのは一本だけでした。

この一本は、大体家を出る時には持ち歩いていたので、この時もジーパンのポケットに入れたのか腹に差して持って出ました。

そして、ママチャリに乗って、直接「タンク山」へと向かいました。

「タンク山」の下へ着き、自転車を停めましたが、五月二四日にB君を連れて「タンク山」へ行ったときには、焦っていたので、「チョコレート階段」の下に自転車を停めていたものの、五月二五日は、時間に余裕があったので、より人目に付かないようにと思い、本来「タンク山」へ登っていく道の入口よりも右側に自転車を停めました。

この日僕が、ママチャリすなわち自転車を停めた場所については、只今検事さんから「タンク山」周辺の地図を渡されたので、その地図に赤のボールペンで

＊

という印を書き込みました。

〔この時本職は、被疑少年が任意に作成し、提出した図面を受け取り、資料四として、本調書末尾に添付することとした。〕

「タンク山」の下に自転車を停めた後、僕は、補助カバンを腹に挟み、ビニール袋は、ジーパンのポケットに入れて、「タンク山」へと登って行きました。

なお、「タンク山」に登り始めた時点で、僕は、手袋をしました。

この手袋は、B君を殺したときに僕がしていた手袋と同じ手袋でした。

ただ、「チョコレート階段」を登って行ったのか、あるいは車が通る道を登って行ったかについては、はっきり覚えていませんが、そのどちらかの道を辿ったことに間違いありません。

そして、「タンク山」中腹にあるタンクの周りを通って、獣道から「タンク山」山頂付近にあるケーブルテレビアンテナ施設へと行きました。

この時、僕は、新たに付け替えた南京錠の鍵を持っていたので、その鍵で、南京錠を

開けました。

問　君は、当初、「付け替えた南京錠の鍵は五月二四日の日に捨てた」と話　　していなかったか。

答　話していたと思いますが、それは、僕の思い違いだったと思います。

切断

六　ケーブルテレビアンテナ施設の中に入った僕は、先程提出した図面に書いた場所に隠していた糸ノコギリをまず取り出しました。

その後、「局舎」の床下に隠していたＢ君の死体の肩の服の部分をしゃがみ込んで引っ張り、Ｂ君の胸から上部分を床下から引っぱり出して、Ｂ君の首が溝の上付近に来るように置きました。

その状況については、今図面を描きましたので、提出します。

〔この時本職は、被疑少年が任意に作成し、提出した図面を受け取り、資料五として、本調書末尾に添付することとした。〕

僕は、ただ「Ｂ君の首を切りたい」とだけしか思っていなかったので、別にワクワクするといった気持ちなどはありませんでした。

その後、僕は、Ｂ君の首の下付近に持ってきていた黒いビニール袋の内の一枚の口を開けて敷きました。

この時、Ｂ君は、仰向けの状態でした。

Ｂ君の目は、開いていました。

問　Ｂ君の死体の目や顔を見ながら、その首を切るのに抵抗はなかったか。

答　別にありませんでした。

　　僕が殺した死体であり、いわば僕の作品だったからです。

そして、僕は、横たわったＢ君の右側に中腰か片膝を着いたかまでははっきり覚えていませんが、持っていた糸ノコギリの柄と先の曲がっている部分をそれぞれ持ち、一気に左右に二回切りました。

すると、肉が引っ掛ったというような感じではなく、ノコの刃が細かったせいか、ス

ムーズに切れ、切り口が見えました。

それで、僕は、この糸ノコギリで、人間の肉が切れるのだと確認し、更に、左手でB君のおでこを押さえながら、右手で首を切っていきました。

僕は、今、現実に人間首を切っているんだなあと思うと、エキサイティングな気分になりました。

首の骨は、肉を切る時の手応えとは違い、硬いというか、ノコの刃は進んでいるのだけど、なかなか切れないといった感じでした。

段々と首を切っていく内に、段々と頭の安定が悪くなったので、最後に僕は、B君の首の皮が一枚になった時に、左手でB君の髪の毛を掴んで、上に引っ張り上げ、首の皮を伸ばして、一気にその首の皮を切りました。

七　この様にして、B君の首を切り落としたのですが、その首を地面の上に置いて鑑賞しました。

地面に置いたB君の首を正面から見ましたが、しばらくは、この不可思議な映像は僕が作ったのだという満足感に浸りました。

ところが、しばらくすると、B君の目は、開いたままで、眠たそうな目をして、どこか遠くを眺めているような目をしていたのです。

更に、B君が、僕の声を借りて、僕に対し

　　よくも殺しやがって。苦しかったじゃないか。

という文句をたれました。

それで、僕は、B君に対し

　　君があの時間にあそこにいたから悪いんじゃないか。

と言い返しました。

すると、B君は、更に文句を言ってきました。

その時、僕は、死体にまだ魂が残っているので文句を言うのではないかと思い、魂を取り出せば黙るだろうと考えました。

そこで、僕は、遠くを見ているような眠たそうなB君の目が気に入らなかったので、持ってきていた「龍馬」のナイフを取り出して、まずB君の両方の目を突き刺しましたが、正確に眼球を突き刺したかどうかまでは分かりません。

目を突き刺した後、二、三回ずつ両方の瞼を切り裂き、更にB君の口の中にナイフを

入れて、口の方から、それぞれ両耳に向けて切り裂きました。

B君の瞼を切ったり、口を切り裂いた様子は、今図面を描いたので提出します。

〔この時本職は、被疑少年が任意に作成し、提出した図面を受け取り、資料六として、本調書末尾に添付することとした。〕

この様にしてB君の口等を切り裂いた後、更に、B君の顔を鑑賞し続けましたが、その後は、B君は文句を言わなくなりました。

同　君の話によると、最初、B君の目は開いていたということだが、君が今　　描いた絵によれば、B君の目は閉じているのは何故か。

答　それは、僕がB君の瞼を上から下に切ったので、それで目が閉じたのだ　　と思います。

その後のことは、後日話します。

（署名・拇印）

（以下略）

供述調書

平成九年七月九日付

（氏名等略）

一　前回に続いて話します。

前回話したように、僕は、平成九年五月二五日昼過ぎ頃、B君の死体の首を切断するために、再び「タンク山」頂上付近にあるケーブルテレビアンテナ施設へ行きました。

そして、前回話したように、B君の首を切断したのです。

B君の首を切断した後に、僕は、ケーブルテレビアンテナ施設の「局舎」の床下から、B君の胸から上ぐらいを溝の方に引っぱり出していたのですが、そのB君の胴体部分を再び「局舎」の下に押し込んで隠しました。

前回話したように、B君の首を切った時には、B君は仰向けでしたので、そのままの

状態で再び胴体部分を「局舎」の床下に押し込んだことから、B君の死体の胴体部分は、仰向け状態になっていたと思います。

その後、前回話したように、B君の首をその施設のコンクリートの地面の上に置いて、鑑賞したり、B君の両目を切ったり、更には、B君の口を裂いたりしました。

B君の両目を切ったり、B君の口を裂いたりしたナイフは、「龍馬」のナイフであり、このナイフは、僕がいつも家にいる時には、僕の部屋の押入のダンボールの横に置いていました。

従って、今回、僕の家を捜索されたということですが、多分その時も、僕の部屋の押入の上の段のダンボールの横から見付かっていると思います。

同　君は、前回「龍馬」のナイフは三本持っていて、内二本は、取り上げられていたので、君が当時使えた「龍馬」のナイフは、一本だったと話しているが、君の部屋を捜索したところ、君の部屋から二本の「龍馬」のナイフが出てきたのだが、その点はどうか。

答　僕の部屋から二本の「龍馬」のナイフが出たということであれば、僕の思い違いだったと思います。

二　ケーブルテレビアンテナ施設内で、B君の首を鑑賞し、B君の口を裂いたりした後でしたが、僕は、B君の舌を切ろうと思いました。

何故、B君の舌を切ろうと思ったかというと、それは、「殺人をしている時の興奮を後で思い出すための記念品」としてもって帰ろうと思ったからでした。

ところが、B君の口は、少しだけしか開いていませんでした。

そこで、僕は、両手でB君の口の中に手を入れようとしましたが、固まっていて、口の中に手を入れることが出来ず、また、口の周りの皮膚に手をあてがって、口を開けようとしたものの、硬くて皮だけしか引っ張れず、口を開けることは出来ませんでした。

その時、僕は、これが、「死後硬直」だと思いました。

本かも知れないし、テレビかも知れませんが、人間の死体は、死後固まってしまうということで、その現象を「死後硬直」と呼んでいることは知っていました。

この「死後硬直」のため、僕は、B君の舌を切り取ることは出来ませんでした。

なお、僕は、以前猫を殺したときに、やはり「殺した時の興奮を後で思い出すための記念品」として、猫の舌を切り取ったことがあり、確か、三枚の猫の舌を塩水に漬けて、

瓶に入れ、僕の部屋に置いていました。

自己嫌悪感

その後、僕は、B君の首を切断する時、血がこぼれないようにと考え、B君の首の下付近に、家から持って来ていた黒色のビニール袋の口を開けて置いていたのですが、僕が最初予想していた程は血は出なかったものの、やはり出血はあり、B君の血がそのビニール袋の中に溜まりました。

どの位血が溜まったかまでは、はっきり覚えていません。

そこで、僕は、ビニール袋の中に溜まったB君の血を飲もうと考えました。

その理由は、「僕の血は汚れているので、純粋な子供の血を飲めば、その汚れた血が清められる」と思ったからでした。

問　どうして君は、自分の血が汚れていると思うのか。

答　それは、幼い子供の命を奪って、気持ち良いと感じている自分自身に対する自己嫌悪感の現れなのです。

問　それなら、B君の血を飲めば、君の血が清められると考えたのは何故か。

答　別に何かの本を読んで思っていたというのではなく、ただその場にB君の血があったので、その血を見てそう思ったのです。

B君の血を飲もうと考えた僕は、B君の血を飲む時に、その血が僕の服に付いたりすれば、証拠が残ったりするので、血が服に付かないように、ビニール袋を持ち上げて、ビニール袋の口を僕の口のところまで持ってきて、口一杯分の血を飲みました。

血を飲んだ時、何か金属を舐めているような感じがしました。

三　その後、僕は、帰ろうと思いましたが、B君の首を鑑賞している時の感動が強かったので、僕は、ここよりも人目に付かないところにB君の首を持って行って、ゆっくり鑑賞しようと考えたのです。

そこで、僕は、持って来ていたもう一つの黒色のビニール袋の中にB君の首を入れ、更に、そのビニール袋の中には、B君の血が入っているビニール袋も入れました。

そして、首等を入れたビニール袋の口を結んだのです。

また、B君の首を切断するのに使った糸ノコギリは、確か持ってきていた補助カバン

の中に入れ、その補助カバンを折り畳んで、腹の中に入れたと思います。

その後、僕は、右手にＢ君の首等を入れたビニール袋を持ち、ケーブルテレビアンテナ施設の外に出た後、付け替えていた南京錠を掛けました。

僕は、この日、「タンク山」に登って来た道を再び降りて行こうと思っていたのですが、ケーブルテレビアンテナ施設を出た直後位に、何か僕が登ってきた方向からガサガサという足音や話し声が聞こえてきました。

咄嗟に、僕は、行方不明になっているＢ君を探すために、自警団の人か警察の人が「タンク山」に登ってきていると思いました。

ケーブルテレビアンテナ施設のすぐ近くまで来ていると感じました。

それで、僕は、登ってきた道を降りていくことは出来ないと思い、別の獣道である高校の方へ降りる獣道を帰ることにしたのです。

別に、焦りという感じはありませんでした。

それというのも、「タンク山」の地理は、誰よりも僕が一番良く知っているのであり、この森の中で、僕を捕まえることは不可能だと思っていたからです。

僕は、別に慌てる訳でもなく、落ち着いて「タンク山」のケーブルテレビアンテナ施設から高等学校がある方へ降りていく獣道を歩いて行きました。

その後の僕の歩いた道順については、只今検事さんから地図を渡されたので、その地図に書き込みます。

〔この時本職は、被疑少年が任意に作成し、提出した図面を受け取り、資料一として、本調書末尾に添付することとした。〕

歩いた道順について、その地図に赤のボールペンで書きましたが、もしかしたら一部道順が違っているかも知れません。

でも、ほぼ今書いたとおりの道順で

入角ノ池

へと行ったのです。

入角ノ池へ最初から行こうと思ったのか、Ｂ君の首を持って歩いている内に思い付いたのかまでははっきりしませんが、とにかく僕は、入角ノ池の近くの森に行けば、人も来ないし、ゆっくりとＢ君の頭部を鑑賞出来ると思って、入角ノ池の方に向かって歩い

て行きました。

森の中

B君の首を入れた黒色のビニール袋を右手に持って、街の中を歩いたのですが、別に僕自身そのことで神経がピリピリするといった感じではなく、ボッーとしたというか、いつもと同じ様な気持ちで歩いていました。

この様にして、入角ノ池の方に向かって歩いていましたが、丁度僕が××（編注・店名）の端の歩道付近を歩いている時、同じ歩道上をT小学校の方向から歩いて来ている女の人を見ました。

その人は、僕がT小学校に通学している時に、T小学校で見たことのある顔の人でしたので、僕は、T小学校の先生か職員の人だと思いました。

その時、僕は、その女の人が、B君を探しているのだろうと思いました。

ただ、その女の人の目と僕の目があった訳でもなく、女の人が僕を覚えているかどうかは分かりません。

T小学校の先生か職員の人と会った場所については、先程の地図に赤のボールペンで

①

と書き込みました。

その後、僕は、地図で書いているような道順を通り、

向畑ノ池

の横を通って、その池の南側にある

友が丘西公園

へ行きました。

地図では、向畑ノ池の西側の道路を通ったというように書きましたが、もしかしたら、その池の周囲を回って、友が丘西公園へ行ったかも知れません。

友が丘西公園の中に入り、僕は、その公園のフェンス横の出入口から森の中に入りました。

その時までは、僕は、これまで歩いて来たのと同じ様に、B君の首を入れた黒色のビニール袋は、そのまま右手に持っていたと思います。

ところが、森にはいると、道が険しくなるので、多分森に入った頃に、B君の首を切

るのに使った糸ノコギリを入れている補助カバンを腹の中から取り出して、その補助カバンの中に、B君の首を入れた黒色のビニール袋を入れました。

そして、その補助カバンを右手に持って、入角ノ池の方に歩いて行きました。

入角ノ池へ行く途中だったと思うのですが、森の中で、三名の機動隊と思える人たちと会いました。

その人達は、黒っぽい服に、前にツバのついた帽子をかぶり、肩には細い縄を掛けていました。

更に、その人達は、その人達の身長よりも長い棒を持っていたので、僕は、僕が知っている警察官の格好ではなかったことから、機動隊の人だと思ったのです。

この機動隊の人と思われる三名の人と出会ったのですが、その時、三人の中の誰かから

君はどこからここに入って来たんだ。

と聞かれたので、僕は

公園の入口から入って来ました。

と答えたのです。

すると、その中の誰かが、僕に

危ないから帰りや。

と言いました。

ただ、この機動隊と思われる三名の人たちと会ったのが、入角ノ池へ行く途中だったと思うと話しましたが、もしかしたら、入角ノ池から帰る途中だったかもしれません。

勿論、僕が森の中で出会った機動隊と思われる三名の人達は、B君を探しているのだということは、すぐ分かりました。

問　君は、森の中で、B君を探している機動隊と思われる人達と会ったと言うが、その時どの様な気持ちだったのか。

答　別に何とも思わず、平常心でした。

僕が、機動隊と思われる三名の人達と会った場所については、正確ではありませんが、一応この辺りだったということで、先程の地図に赤のボールペンで○印を書き込みました。

木の根本の穴

四　入角ノ池には、以前に数回行ったことがありましたが、別に道順を覚えていた訳ではなかったものの、友が丘西公園からは、道があるので、その道なりに歩いて行きました。

そして、その道から入角ノ池へ降りたのですが、池へ降りる道を探すと、ロープが目に入ったので、そのロープを伝って入角ノ池の淵へと降りました。

入角ノ池の淵へと降りて、B君の首を隠す場所はないかと辺りを見回したところ、池の方に木が生えだしたところがあり、その木の根本の向こう側に、丁度首が入る位の穴がありました。

その穴の様子等については、今図面を描いていたので提出します。

〔この時本職は、被疑少年が任意に作成し、提出した図面を受け取り、資料二として、本調書末尾に添付することとした。〕

今描いた図面で

沼

と書いたのが、入角ノ池のことであり、木の根本に○印を書いたのは、その木の向こう側の○印の付近辺りに穴があったということです。

〔この時本職は、平成九年七月八日付、本職作成にかかる写真入手報告書添付の写真番号1ないし写真番号5の各写真を示し、その写しを資料三として、本調書末尾に添付することとした。〕

今お示しの写真は、何でも僕が刑事さんに五月二五日の日に切断したB君の首を入角ノ池へ持って行き、木の側にあった穴に置いたと話したことから、警察官の人がその様な場所があるかということで、確認するために入角ノ池へと行って、撮ってきた写真だということが分かりました。

その写真の内、番号1の写真に写っているロープが、先程僕が話した入角ノ池へ降りてくるのに利用したロープです。

番号2から番号5の写真は、入角ノ池の水面に生えだした木や、その木の根本の穴が

写っていますが、確かにこの様な場所の穴にＢ君の首を置いたことに間違いありません。

しかし、写真に写っている穴に、Ｂ君の首を置いたかどうかまでははっきりしません。

それというのも同じ様な穴は、もしかしたら別にもあるかもしれないと思うからです。

入角ノ池の淵の木の根本付近の穴を見付けた僕は、まず補助カバンの中から、Ｂ君の首を入れた黒色のビニール袋を取り出しました。

そして、僕は、そのビニール袋を僕の足下に置き、ビニール袋の口を開けて、袋の口を下まで降ろして、Ｂ君の首を出しました。

ビニール袋の中からＢ君の首を取り出したという訳ではなく、袋に入れた状態で首だけを出したのです。

至近距離からＢ君の首を鑑賞しました。

僕自身、新たに人のいないところでＢ君の首を鑑賞すれば、何か新しい感動が得られるのではないかと期待していました。

しかし、Ｂ君の首を鑑賞したものの、大した感動はなく

　　ああ、こんなものか。

と思った程度でした。

それで、二、三分しか鑑賞せず、再び下げていたビニール袋の口を上げて、その口を結び、穴の中に袋ごとＢ君の首を押し込みました。

問　君は、当初Ｂ君の首を切断したり、Ｂ君の首を別のところへ移動したのは、Ｂ君の首には、自分の指の跡などが付いており、それが分かれば、自分が犯人と疑われるからだと話していたが、その点はどうか。

答　それは、単なる理屈付けを話したのです。

五　この様にして、僕は、Ｂ君の首を入角ノ池の淵にある穴に入れて、再び来た道を帰りました。

帰るときには、補助カバンは持っており、そのカバンの中には、Ｂ君の首を切るのに使った糸ノコギリを入れていました。

そして、再び友が丘西公園を通り、向畑ノ池へと来たのです。

向畑ノ池へ来た僕は、先程の地図に

　　②

と書いた付近から、池の中に、Ｂ君の首を切った糸ノコギリを投げ捨てました。

ただ、もしかしたら、糸ノコギリを向畑ノ池に投げ捨てた時期は、帰る時ではなく、入角ノ池へ行く時だったかも知れません。

問　「タンク山」のケーブルテレビアンテナ施設に掛けられていた南京錠は、どうしたのか。

答　僕が、糸ノコギリでツルを切った南京錠については、向畑ノ池に捨てたことに間違いありませんが、捨てた時期については、この日だったかどうかまでははっきりしません。

問　「タンク山」のケーブルテレビアンテナ施設に付け替えるためにLから万引きした南京錠の内、残りの南京錠やそれぞれの鍵はどうしたのか。

答　これらは、おそらく入角ノ池に捨てたと思いますが、向畑ノ池に捨てたという可能性もあります。捨てた時期は、はっきり思い出せません。

そして、僕は、向畑ノ池から「タンク山」の下付近に停めていた自転車を取りに戻った後、家に帰りました。

家に帰った時間が何時頃であったかまでは、はっきり覚えていません。

観察

六　五月二五日の夜中も、僕は、目が覚めて、物思いにふけりました。

その時、僕は、人間の死体が時間と共にどう変化するのか非常に興味を持ちました。

死体の変化が、明日はどうなっているのだろうと思ったのです。

僕は、明日もB君の首を見るために、入角ノ池へ行こうと思いました。

問　B君の胴体部分を置いている「タンク山」へは、行こうと考えなかったのか。

答　考えませんでした。

それは、B君の胴体部分は、服を着ていて、死体の変化を見るためには、服を脱がせたりしなければならないからです。それが、面倒臭かったからです。それに、「タンク山」だと、人が登ってくる可能性があったからです。

五月二六日の朝も、いつものように、午前一〇時頃、起きました。

そして、いつものように一人で、朝食兼昼食みたいな感じで、食パンを焼いて、紅茶と一緒に食べました。

その後、昼過ぎ頃に、B君の首を見るために、ママチャリに乗って友が丘西公園の中

まで行き、その公園の出入口のところにママチャリを置いて、そこから歩いて、入角ノ池へと向かったのです。

僕は、入角ノ池へと行く道順は、この道順しか知りませんでした。

そして、五月二五日と同じ道順を通って、B君の首を置いている入角ノ池の淵にある木の根本の側の穴まで行きました。

そして、僕は、その穴の中からB君の首を入れたビニール袋を取り出し、それを池の淵の地面に置いて、ビニール袋の口を開けて、それを下のほうにずらし、B君の首全体をビニール袋の上に出しました。

僕は、そのB君の首を至近距離から五、六分位観察しました。

この時は、鑑賞ではなくて、観察したのです。

観察した結果、B君の顔等は、色が二五日に増して、青白くなっていたということ以外は、取り立てて二五日と変化があるようには見えませんでした。

僕は、二五日のB君の首と二六日の首とでは、一日時間が経っているので、もっと大きな変化があるのではないかと期待していたのですが、ほとんど変化がなかったので、がっかりしました。

五、六分位、B君の首を観察した後、僕は、このB君の首については、あまり変化もなかったことから、これ以上大きな変化はないと思うと、興味がなくなりました。

B君の首に興味がなくなると、今度は、このB君の首をどこに隠そうかと思いました。

しかし、どこかに隠そうかと思ったものの、僕は、日本の警察であれば、どこに隠したとしても、遅かれ早かれ胴体も頭部も発見されてしまうだろうと考えました。

どうせ遅かれ早かれ警察に発見されるのであれば、むしろ僕の方からこのB君の首を敢えてさらすことで、警察の捜査から僕を遠ざけようと考えたのです。

次に、B君の頭部を放置する場所をどこにしようかと考えました。

その結果、僕が通っているT中学校が、警察にとっては一番盲点になるのではないかと思いました。

何故なら、まさかT中学校の生徒が、自分が通っている中学校に首を置くはずがないと思うだろうし、そうなれば、捜査の対象が、僕から逸れると考えたからでした。

更に、もう一つの理由としては、僕自身、小さい頃から親に、人に自分の罪をなすりつけては駄目だと言われて育ちました。

それで、僕は、B君を殺したりしたことに対し、一方ではそんな僕自身に対して嫌悪

感があったので、何とか責任逃れをしたいという気持ちもありました。

しかし、人に罪をなすりつける訳にはいかないので、僕自身を納得させるために、学校がＢ君を殺したものであり、僕が殺した訳ではないと思いたかったのです。

単に、学校に責任をなすりつけるための理由であり、実際に学校に対する怨みや学校の教育によって、こんな僕が出来てしまったと思っていた訳ではありません。

Ｔ中学校にＢ君の首をさらすにしても、どこに置くかと考えましたが、当然、それは一番目立つ場所が良いと思い、そうなれば、当然、Ｔ中学校の正門に置くのが良いと考えました。

そこで、僕は、再びＢ君の首を入れているビニール袋の入口を上に引き上げて、Ｂ君の首をビニール袋の中にすっぽりと入れて袋の口を閉じました。

そのビニール袋を持って、入角ノ池から自転車を停めている友が丘西公園まで歩いて行き、そこからＢ君の首を入れたビニール袋を自転車の前カゴに入れて、自転車に乗って家へと帰ったのです。

七　家に帰った時には、家には誰もいませんでした。

家に帰る途中、僕は、Ｂ君の首を洗うことを考えました。

その理由は二つありました。

一つは、殺害場所を特定されないように、頭部に付着している土とか葉っぱ等を洗い流すためでした。

あと一つの理由は、警察の目を誤魔化すための道具になって貰う訳ですから、血でＢ君の顔が汚れていたので、「せいぜい警察の目から僕を遠ざけてくれよ、君の初舞台だよ」

という意味で、顔を綺麗にしてやろうと思ったのです。

そこで、家に帰った後、僕は、すぐに一回の台所の奥にある

　　風呂場

に、Ｂ君の首を入れたビニール袋を持って行きました。

そして、そのビニール袋を床に置き、庭にタライを取りに行きました。

そのタライを風呂場に持って来た後、ビニール袋からＢ君の首を出し、その首をタライの中に入れました。